

2015年度 関西学院高等部 学校評価を終えて

関西学院では、学校教育法の改正を契機として初等部・中学部・高等部が互いに連携をとりながら整合性のとれた学校評価を実施する制度を構築してきました。また上記の組織以外に幼稚園、千里国際中等部・高等部、大阪インターナショナルスクールも学校評価に加わり、世界市民を育成するという同じ目的を持つ関西学院の共同体として、総合学園としての教育の繋がりを深めつつあります。

2010年度からは、関西学院が幼稚園から大学院まで連なる総合学園である強みを生かし、接続する学校の教職員でもある先生方に、専門的な視点からのご意見をうかがうことで、第三者評価と学校関係者評価の両方の性格を併せ持つ「第三者評価／学校関係者評価」を導入しています。今年度は高等部内の自己評価に対して、教職教育研究センター教員、中学部長、千里国際中等部・高等部校長、評価情報分析室室長の意見を伺って、客観的な評価、指摘をいただきました。教育研究関係者、大学教職員、中学校、高等学校といった教育に関わっておられる見識ある方々にいただいた評価や指摘を、今後の高等部教育発展の糧にさせていただきます。

関西学院独自の評価項目として、「キリスト教主義教育の実践」を、学校評価ガイドライン（文部科学省、2010年7月付）で示された学校運営における12分野の項目の中から、「教育課程・学習指導」「教育環境整備」を選び、さらに高等部は重点的課題として、「人権教育」、共学化元年に伴い女子生徒への指導が始まったことを踏まえて「生徒指導」を設定して実施しました。また、2014年度より文部科学省から採択を受けたスーパーグローバルハイスクール（SGH）に関連して「国際理解教育」を継続しました。2015年度の学校評価実施にあたっては、それぞれの評価項目について生徒・保護者・教員のご意見を伺うためにアンケート調査を行い、客観性を高める工夫をいたしました。今年度の回収率は、生徒99.9%（前年度回収率98.2%）保護者59.9%（前年度回収率60.2%）教員100.0%（前年度回収率95.5%）でした。

今年度より、共学化が完成した中学部からの入学生（初等部よりの入学生を含む）と初めての男女入試を経て入学した一般中学からの生徒が合わさって高等部共学化1年目が開始しました。共学化に伴い、7クラス編成を9クラス編成に増員しました。今後1年間は男子のみの学年と共存する移行期となりますが、これまで培ってきた伝統を大切にしながら、新しい体制を構築し、高等部新時代を切り開いていく所存です。また、SGH事業も2年目を迎え、態勢が整って様々なプログラムへの取り組みを積み上げています。スーパーグローバル大学（SGU）に採択された関西学院大学との連携をより深めながらこの事業を進めていきます。なお、この2年間の事業および成果報告を文部科学省に提出し、中間評価を受ける予定です。2015年度の学校評価で得られたことを真摯に受け止め、共学校としての新しい歩みを全力で取り組んでいく所存です。

関西学院高等部はこれからも学校評価を通じて自らの課題を探り、その課題に誠実に向き合っ、改善を目指していきます。2015年度高等部の学校評価を項目別にまとめたものを、以下に掲載いたします。今後とも、各部門において改善に努めていく所存ですので、どうぞよろしく願いいたします。

2016年3月11日
関西学院高等部
部長 石森圭一

学校評価

教育理念・使命・目標

高等部の教育目標は「イエス・キリストを通して、人と世界に仕える使命感と実力を養い、豊かな心と真摯な態度を備えた人格を培う。」としている。礼拝、聖書科授業、宗教的行事を通してイエス・キリストから生き方を学び、又その学びの目的を他者に対して仕えるためであるという学院のモットー「Mastery for Service」を体現する世界市民の育成を目指す。一貫教育を柱として、大学で学ぶ力を身につけ、多様な社会の要求に応えうる総合的な人間力を養う。

2014 年度より文部科学省に採択されたスーパーグローバルハイスクール（SGH）事業を軸に国際感覚を身につけた人を育成をする。

2015 年度の評価項目

- キリスト教主義教育の実践：高等部の教育の根幹をなすため、毎年の評価項目として設定している。
- 教育課程・学習指導：重要項目であり、特にカリキュラムや科目の変更に応じるため、毎年の評価項目として設定している。
- 生徒指導：共学化元年に伴い、女子生徒への指導が新たに始まったため、この項目を設定した。
- 教育環境整備：共学化元年に伴い、生徒数増加、女子生徒の入学に対応するための設備を整備することは重要であるため、この項目を設定した。
- 人権教育：重要項目であり、経年変化をはかるため、毎年の評価項目としている。
- 国際理解教育：SGH事業が2年目を迎え、生徒の国際理解への姿勢をはかるため、この項目を昨年度から継続して設定した。

2015 年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	キリスト教主義教育の実践 【キリスト教主義教育の理念の共有・実践】	自己評価	A
目標	建学の精神の体現		
具体的な取組の 状況とその効果 に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> ●教員については多くの質問項目について非常に高い肯定的な回答結果であった。 ●生徒質問1「高等部の教育にとって、キリスト教はその土台である」、2「礼拝の時間は大切だと思う」、3「聖書の言葉には共感できる部分がある」の肯定的回答が、昨年よりもそれぞれ約5%～7%上がり、62.1%、67.4%、71.0%となった。共学化により女子が入ってきたことが一つの大きな要因であると考えられる。女子のみを抽出した肯定的回答の結果が高かった（それぞれ67.8%、81.5%、78.1%）ことから読みとれる。 ●生徒質問4「学校は、学校外部のキリスト教関連団体（教会・ボランティア）に関心を持っている」については、48.7%（昨年50.5%）と昨年と比べてあまり変わらなかった。しかし、女子のみを抽出した肯定的回答は男子校であった昨年より増え59.6%であった。この結果の要因としては、学友会（生徒会）が主催、運営する子ども会、ボランティア委員会などへの学友会役員からの積極的な参加の呼びかけに対して応えた生徒（特に女子生徒）が多くいたことや、また高等部がSGH校であることから、そのような学びの機会が多かったことが考えられる。 ●聖書科の授業や全校・学年礼拝の中で、授業担当者や講師の先生方によるキリスト教を通じた生徒への語りかけが、自由出席である毎週火曜日の早朝祈祷会に出席状況（全体平均出席119.7名）が良くなっていることや、活発になってきた宗教部員を中心とした宗教活動の状況（20名以上の参加）に、良い影響を与えていると考える。 ●保護者質問1「学校が実施しているキリスト教主義教育は、子どもの人間的成長に寄与している」の肯定的回答が82.7%（昨年は84.3%）であった。保護者の集いの一つである「聖書を学ぶ会」の出席者数が安定して多いことから、保護者のキリスト教主義教 		

	<p>育への関心が非常に高いことがうかがえる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●しかしながら、教員質問6「学校は、生徒に教会出席を奨励している」において、67.4%の肯定的な回答に止まった。日曜日にもある活発なクラブ活動における公式戦や練習などがあるため、生徒への教会出席励行のバランスが課題であると考えられる。
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ●今後もチャペルのあり方、キリスト教行事の工夫など、更に検討を行い、聖書科教員のみならず、全教員が協力し合うことでキリスト教主義教育の実践に取り組んでいく。 ●宗教的な授業内外の取り組みに積極的に関わる生徒の育成に力を入れ、またそのような活躍の場を更に提供することで、そのような生徒中心にキリスト教主義教育の輪を広げていく。 ●生徒、教員だけでなく、保護者に対してもキリスト教主義教育に触れていただく機会を引き続き提供する。 ●忙しい生徒に教会出席を奨励していく方法を宗教委員会などで引き続き議論する。

評価項目 【テーマ】	教育課程・学習指導 【接続する大学が求める学力を保證する学習指導の実践】	自己評価	A
目標	<ul style="list-style-type: none"> ●接続する大学で学ぶ力を保証し、社会の要求に応えうる総合的知識を習得する。具体的には1. 基礎学力の向上、2. 興味や関心に応じ深く学ぶ、3. 知の統合を目標として掲げる。 ●その中で学習に躓きのある生徒への補習などきめ細やかな対応をする。 ●教育課程や接続する大学への進路ガイダンスを適切に行う。 		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> ●生徒質問7、8、9、10などの、主に生徒の学力がついているかの実感や授業内容についての質問において、70%～80%の肯定的な回答を生徒と保護者から得た。特に生徒質問8「授業を通じ、学力がついている」は73.2%で、昨年度比7.8%と増加した。これは近年取り組んでいる英語・数学・国語の週課題や宿題等の質・量が増加し、それが基礎学力の定着に結び付いているという実感につながっていると思われる。学力向上のための取り組みについて概ね、順調であると考えられる。 ●生徒質問12「補習などは適切に行われている」は71.3%で比較的高い肯定的回答を昨年度から維持している。具体的には英語や数学が苦手な生徒対象に開講している特別授業や、英語、数学、国語に関して宿題が未提出の生徒、あるいは小テストにおいて基準点を満たさなかった生徒に対して放課後に行う居残課題という取り組みを数年続けている。 ●教育課程の説明（進級・推薦・卒業）に関しては、生徒質問5、保護者質問2、教員質問10において、80%～90%の肯定的な回答を得た。各学年に対してその都度行う説明会に対して理解が得られていると理解できる。 ●接続する関西学院大学に関する情報の提供に関する質問においても、生徒の80.4%、保護者の77.0%から肯定的回答を得た。しかし、1年生の女子生徒に限定すると、それは71.2%と下がり、3つの学年の男子の回答の82.4%と比較すると10%以上の差がある。これは関西学院大学の各学部へ推薦する基準数を含め、女子が望む情報提供が不十分であると推測される。 		
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ●学力向上を目指す取り組みを学力向上プロジェクト委員会を中心に、学校全体で進めて行く。 ●基礎学力の定着をより一層進めるため、英語・数学の特別授業・宿題指導の継続・強化を行う。 ●教育課程の説明（進級・推薦・卒業）については現在の取組を継続し発展に努める。女子生徒への大学進学に関する情報提供の改善について、教員自身が不十分 		

	であると感じているのと併せて、今後どのような情報が望まれるのか、アンケート調査を行うものとする。
--	--

評価項目 【テーマ】	生徒指導 【気持ち良く学校生活を送るための生活指導の徹底】	自己評価	B
目標	学校生活のルールを守り、規則正しい生活習慣を養う。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> ● 共学化に際し開始した高等部の制服化が完成するため、以前からの男子の制服指導に加え女子の制服指導を行った。制服の着用ルールや着こなし等、概ね問題なく推移しているが、学校生活に慣れるに従ってネクタイ・リボンの緩みや規定外の髪飾りの使用、化粧の使用など若干の校則違反も発生している。そして生徒質問 16「守るべき学校生活のルールやマナーがはっきりしている」では、生徒ハンドブックにきちんと記載されているものの、生徒の半数近くが否定的な回答をしている。 ● 自転車の道路交通法の改正・兵庫県の条例の制定により、以前の自転車登校指導よりも更に細やかな指導を行い、1年生の自転車登校許可に際しては自転車任意保険の義務化を行った。4月より新体育館地下の駐輪場運用も始まったが、自転車の乗り入れのルールも概ね良好に推移している。 ● 「不正やいじめを許さない指導」、「問題行動やトラブルへの適切な対応」について、生徒(質問 17、18)、保護者(質問 10、11)は、45%～60%が肯定的な回答をするに止まっている。これは、今年度に部活動内での重大ないじめ事件が発覚した影響が大きいと考えられる。本件に関しては、学校として慎重に対処、関係生徒への厳重な指導を行うとともに、保護者説明会の開催、また人権教育の観点から教員研修を行うなどの取り組みを行った。 		
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ● 制服の指導及び自転車登校の指導は比較的順調に推移しているため、今後も継続してその指導と校則や校内風紀を順守する意識を育み、共学化の完成時には全校に徹底した校則を順守する風紀を根付かせる。今後も交通指導を徹底し、加害者にも被害者にもならないマナーを身に付けさせる。 ● 高等部は昨年度まで男子校であったことから女子教育に関しては経験がないが、男女を問わず生徒に誇りを持たせ、共学完成時まで教員も様々な変化に柔軟に対応する姿勢をもって歩む。 ● 今年度発生したいじめによる事案を教訓にし、今後学校として人権教育などを通じいじめを許さない姿勢を更に強く示し指導する。具体的にはホームルームでは担任が、また部活動においては顧問が生徒の言動や行動に対しより心を配り、生徒との信頼関係を構築し、様々な問題を早期に解決できるよう取り組む。 		

評価項目 【テーマ】	教育環境整備 【共学化に伴う学校設備の準備・改善】	自己評価	A
目標	<ul style="list-style-type: none"> ● 男女共学、定員増に対応した施設・設備の充実を図る。 ● ICT、アクティブラーニングなどを活用した、新しい時代の教育に対応できる教育環境を整備する。 		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> ● 2010 年度からの高中部整備充実計画により、女子トイレや女子更衣室の新設、視聴覚教室や礼拝堂の座席増など、男女共学、定員増に対応した設備の整備を進めてきた。2013 年度には高等部特別教室棟、2014 年度には高等部本館の改築、2015 年度には高等部新体育館が完成した。 ● 本校の教育環境整備全般について、生徒(質問 19～21)、保護者(質問 12～13)、 		

	<p>教員(質問 28～32)ともに高い評価を示している。概ね、本校の施設・設備の整備が順調に進められていると判断できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●現在の本校のICT機器の整備の水準について、生徒の90%弱が肯定的な回答をしているのに対して(質問21)、教員の約45%は否定的な回答をしている(質問33)。このことは、デジタル教材などの時代に対応したICT機器のさらなる整備を、多くの教員が必要と感じていることを表していると考えられる。
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ●現在の充実した施設・設備の、良好な維持、管理を行う。また、生徒の意見も尊重しながら、共学化が完成するまでその更なる整備・充実を行う。 ●現在のICT教室3室を運用し、他の特別教室のICT機器についても順次、改善を進める。またデジタル教材を用いた授業の指導法の研究や教材開発に取り組み、今後、タブレット端末を利用したICT教室の増設などを計画し、将来的な更なる整備・充実を行う。

評価項目 【テーマ】	人権教育 【人権尊重の精神と実践力の育成】	自己評価	B
目標	<ul style="list-style-type: none"> ●情報化やグローバル化の進展に伴い、多様化・複雑化する人権課題に対し、生徒たちが問題意識を共有できるようにする。マイノリティが大切にされる社会がなぜ必要なのかをよく理解し、人権尊重の文化を育てていくための主体的市民となることを目指す。 		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> ●人権教育の柱を構成するものとして、学年礼拝の時間帯(10:20～10:45)に人権講座を実施している。一学期は1年生(テーマ:「身近な人権問題」①いじめについて②ネット社会と人権③「男女共生社会」が目指すもの)、二学期は3年生(テーマ:「人権を見る視点～『暴力』を中心に～」①平和と人権②様々な人権問題)、三学期は2年生(テーマ:「力をかけ続けることの必要性～数十年の単位で人権問題を考える～」①部落差別②障がい者差別)と学期ごとに異なる学年を対象にして展開している。人権講座のシラバスを作成し、全教員、対象学年の全生徒に配布している。 ●「いじめのアンケートや人権講座・情報科の授業・ホームルームでの取り組み等を通して、学校としていじめの問題を把握し、その防止に取り組んでいる」という質問において、否定的な回答が、昨年と比べて生徒(質問23)は36.2%から41.7%に、保護者(質問14)は20.2%から38.4%に、教員(質問37)は9.5%から19.6%に増加している。これは、6月に発覚した部活動内でのいじめ事件が大きく影響していると思われる。人権教育の観点からも、今回の反省に立って、いじめ防止への取り組みを人権教育のみならずHR活動とも有機的に結びつけていくことが必要である。8月末にはいじめ問題に関する全教員対象の研修会を実施した。 ●9月に全校生を対象に「いじめアンケート」を実施した。(2007年度より継続)今回の事件を受けて、厳しい意見も寄せられたが、生徒達からのSOSを敏感に感じることが、いじめ問題への対処の大切な要素であると考えます。 		
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ●クラス増に伴い、単に知識を伝達するのみならず、より双方向的な取り組みを含む、HR活動などと連携した新しい人権講座のあり方を検討する。 ●いじめの防止に継続して取り組み、人権侵害を受けている生徒が声を上げられるような学校づくりを目指す。そのために教員研修を継続する。 		

評価項目 【テーマ】	国際理解教育 【国際的な問題への取組意欲・関心の向上】	自己評価	A
目標	<ul style="list-style-type: none"> ● S G HのプログラムとしてのG G P（全生徒対象）や各教科を通して、世界共通の価値観や世界規模の課題に対応する姿勢を育み、また同時に異文化理解を深める。 ● 語学力や国際性を身につけるために、短期・中期・長期留学希望、海外渡航の意欲を育成し、国内外で開催される国際交流プログラムへの積極的な参加を促す。 		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> ● 2014 年度に文部科学省からスーパーグローバルハイスクール（S G H）の指定を受け、G G P（General Global Program 全生徒対象）、G L P（Global Leader Program に選抜された生徒）と二層の教育プログラムを実施して2年目を迎えた。2015 年度はG G Pについては、昨年に引き続きグローバルな課題やテーマについて大学教員を中心に多くの講演会を実施し、また学院全体のシンポジウム等の参加も促し、全生徒に社会・国際問題についての関心・興味を高める機会を与えることができた。G L Pについては高1対象のG S I（Global Study I）と高2、3年対象のG S II（Global Study II）に分かれ、世界を知り、グローバルな課題を解決・実践する力を身につけることを目標とし、週1回の放課後に1時間授業を行った。授業は大学教員を中心に高等部の教員が協力して行い、基本的に授業や、生徒のプレゼンテーション等も英語で実施し、実践的な語学力を高める活動につなげることができた。 ● G G Pは大学教員や世界で活躍する著名人を招いての講演が中心であったが、今年度のG G Pの特徴としては、高1の学年の全体プログラムとして新聞記事を用いてのポスターセッションを実施した。村尾信尚教授に大型プリンターで打ち出された各クラスのポスターをそれぞれ講評していただき、その後グローバルな視点での講演も開催した。 G G PやG L Pの影響もあり、生徒質問 25「国際的な問題や世界の出来事などに興味・関心が強くなってきたと感じる」については昨年度は全体での肯定的評価は 68.7%であったが、今年度は高1女子生徒だけでは 73.3%と肯定する割合が高い。また高1、2、3年生の男子生徒では69.9%が「感じる」とし、全体としても少し向上している。教員は教員質問 39「学校は、生徒の国際的な諸問題（国際協力、環境問題、紛争など）への関心を高める努力をしている」については肯定的評価は昨年の 85.7%から 97.8%と伸び、高い割合で学校の取り組みを評価しているが、生徒の受け止め方と教員の間に開きがみられる。教員側だけの満足ではなく、生徒側へもプログラムの意義についてもっと掘り下げて説明していかなくてはならない。また保護者は保護者質問 16「学校は、生徒の国際的な問題への関心を高める努力をしている」について 73.2%が肯定的な回答をしているものの、その割合は昨年度と変化が見られない。 ● 短期・中期・長期留学の説明会を開催し奨励しているが、生徒質問 27「将来、海外に行ったり、機会があれば留学したいと感じている」についての肯定的評価は 72.7%、同様の保護者質問 18 については 64.7%、同様の教員質問 41 については 89.1%と昨年度から変化が見られない。テロなどの世界情勢の影響が否めないと感じる。 		
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> ● S G Hのプログラムが学校全体のプログラムであることをもっと全教員・生徒に認識させ、積極的な参加を促すとともに、保護者からの関心や理解を得ていく。S G Hプログラムがそのプログラムに携わる一部の教員のみによって運営されることなく、全教員的意思疎通と理解のもとで進められるものとなるようにする。そのためには、各会議でのS G H情報の発信と、全体の教師会や学年会での情報の共有が不可欠となり、また生徒対象のみならず、教員対象の研修も積極的 		

	<p>に行っていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●留学団体の協力を得た短期・中期・長期留学について、また国際交流プログラムについての説明会を積極的に全生徒・保護者に告知し、且つ実施していく。国際交流部や英語科の教員のみならず全教員が留学制度や国際交流プログラムについて情報を共有し、理解を深め、生徒の海外留学、海外渡航意欲を高めていく。 ●学校内での国際交流の一貫として、本校で毎年受け入れている留学生と生徒同士の交流は意味があり非常に重要な役割を果たしている。学校として受け入れる留学生の数を増やすために、高等部の在校生の中で学校から近距離でホストファミリーとして貢献してもらえ家庭を確保する登録制度を確立していく。
--	---

(自己評価)

A+=テーマに対する目標を達成した。

A=テーマに対する目標を概ね達成した。

B=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行しているが、達成にはまだ時間がかかる。

C=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行していない。

総合評価

これまで男女共学化を迎えるに当たって、校舎の改装や特別棟、専用体育館新設などのハード面と、女子生徒の指導や部活動等、また共学化に伴う定員増、クラス増、そして新学習指導要領導入によるカリキュラム改訂などの様々なソフト面の整備を行ってきた。初めての男女入試は志願者の増加とともに、レベルの高い選考となり、初等部卒業生を含む中学部からの進学生とともに4月から共学校としてのスタートを切った。2年前の入学生（現高3）から導入していた制服化によって、統一した形で4月からの新学期を迎えることができた。準備の段階で抱いていた不安を生徒たちは喜びへと変えてくれ、生徒たちの活躍が学校全体の雰囲気明るく導いてくれた。その中で1学期に起こった部活動内でのいじめ事件は、生徒や保護者の方々に多大な心配と不安をおかけした。この反省、課題を生徒指導、人権教育の両面で活かしていかなければならない。

また、2年間のSGH事業を経て、英語、社会だけでなく国語、家庭科などの協力も得て取り組みが広がってきた。運営する組織や人員・人材も徐々に整備されて、事業が軌道に乗ってきている。この2年間の取組は文部科学省の中間評価を受けることになる。その評価も踏まえて、2016年度は3年間の継続的な取組としての完成を迎える。大学のSGU事業につながるものとして、学院全体のミッションである「世界市民の育成」に努力していきたい。さらに学院中期計画に基づき、学力の定着、ICT環境の整備等進捗させていく。

2015年度の評価をふまえて2016年度に予定している評価項目、テーマ等

2016年度は、最上級生だけが男子学年、そして7クラス編成という過渡期の最終年度となる。共学化2年目となる来年度の評価項目としては、高等部の教育の土台となる「キリスト教主義教育の実践」はもちろんのこと、学習内容の中心となる「教育課程・学習指導」の項目、また今年度の大きな反省を踏まえ、「生徒指導」「人権教育」も評価項目として設定する予定である。また、SGH事業も文部科学省の中間評価を受けて、3年間を通じてのプログラムを構築していく中、「国際理解教育」の評価項目を継続する。

第三者評価／学校関係者評価

共学化に伴い、キリスト教主義教育の浸透が生徒に順調に進展しています。今後は、1年生の結果からもうかがえるように、特に男子生徒へのより積極的な働きかけが必要と思われます。

教育課程・学習指導については、院内推薦制度を前提とした教育課程を整備する中できめ細やかな学習指導が展開されていること、さらにICT機器の整備が進んでいることが大変評価できます。

ただ、接続する関西学院大学に関する情報提供の状況については、肯定的評価に一定の男女差が生まれています。それぞれの心理的・発達的特徴を踏まえた進路指導の実施が望まれます。

心身ともに変化が大きい高校生を対象とする生徒指導に関しては、共学化に即した様々な方法の導入と丁寧な指導の展開の点で優れています。一方、昨年度の事案に関する課題を通して、高等部の教育目標の実現を目指した新しい人間関係の構築が期待されます。中でも、生徒と教員のコミュニケーションに関する設問では、100%の教員が肯定的回答を示す中、生徒全体・保護者では約70%、1年生女子では約55%となり、教員側の努力と実感が、生徒・保護者の実感につながっていない様子が見えます。

生徒・保護者ともに学力向上の肯定的な評価の割合が今年度では上昇または高水準で維持されていることをもとに、生徒の個性・能力に応じた学習指導や部活動指導などを展開する中で、人権教育を充実させながら、今後も生徒とのコミュニケーションおよび家庭との連携をより一層図ることが求められます。

グローバル・リーダー育成をめざしたSGHの教育プログラムが2年目を迎え、ポスターセッションを実施することなど、全校あげて積極的に成果発表が行われていることを高く評価します。国際的な関心が高い傾向にある女子生徒からよい刺激をうけて、SGHプログラムと国際理解教育のさらなる発展と充実が期待されます。

2015年度の高等部の教育活動全体によって、総合学園としての関西学院の一貫教育の展開と充実が進展しています。そして、ともに中等教育を担う中学部との接続を一層強化しながらより大きな推進力となることが望まれます。

SGH 2年目を迎え、グローバルな教育は益々深まりを見せているようです。教職員とのコミュニケーションが十分ではないと感じている女子生徒が半数近くいるというのは女子を受け入れ始めた学校の経験する苦悩でしょう。しかし、コミュニケーションはこれからの教育の中心となるべき重要な課題です。時間をかけてこの点がうまく動くようになれば、女子生徒たちは、今抱えている校内の他の問題に対しても良い影響を与えることができると思います。女子生徒という新しい学校の構成者たちが学校に多様性と優しい秩序をもたらすことに期待します。

キリスト教主義教育や授業、学習面での評価、またSGHによる国際理解教育など、肯定的な評価が上昇している点は、高等部の先生方の取り組みが生徒達に浸透している証拠です。共学になったことも確かに原因と思われますが、生徒たちが前向きに学校生活に取り組んでいる姿勢が、アンケートの数字からも、あるいは普段見かける高等部生の明るい表情からも、うかがい知ることができます。

共学の過渡期を迎えて、様々な面で細かい配慮が必要となる時期でもありますが、生徒一人ひとりにとっての今と将来を見据えて、何が一番大切であり、守っていかなければならないのかを、教育の軸としてしっかり持っていることが重要であると考えます。共学となった高等部は、今とても注目されています。ラグビー部や剣道、アメリカンフットボール、グリークラブはじめ、部活動での輝かしい成果はもちろん、対外的な奉仕活動や学問の成果などを含め、さらにより質の高い教育、より安心できる学び舎をめざして進んで行かれることを、これからも期待します。

「キリスト教主義教育の実践」については、教員、生徒に対する質問の回答が昨年度より肯定的回答が増加しており、昨年度より改善されていると考えられます。

「教育課程・学習指導」については、昨年度より肯定的な回答が増加し、高い水準を維持している点は、評価できます。関西学院大学に関する情報の提供については、1年生女子に対する情報提供の改善が期待されます。学力向上のための取り組みを進めていただくことが期待されます。

「生徒指導」については、特に「不正やいじめを許さない指導」などを、人権教育の視点からの方策を通じて改善することが期待されます。

「教育環境整備」については、生徒、保護者、教員が全般的に高い評価をしている点は、大変評価できます。

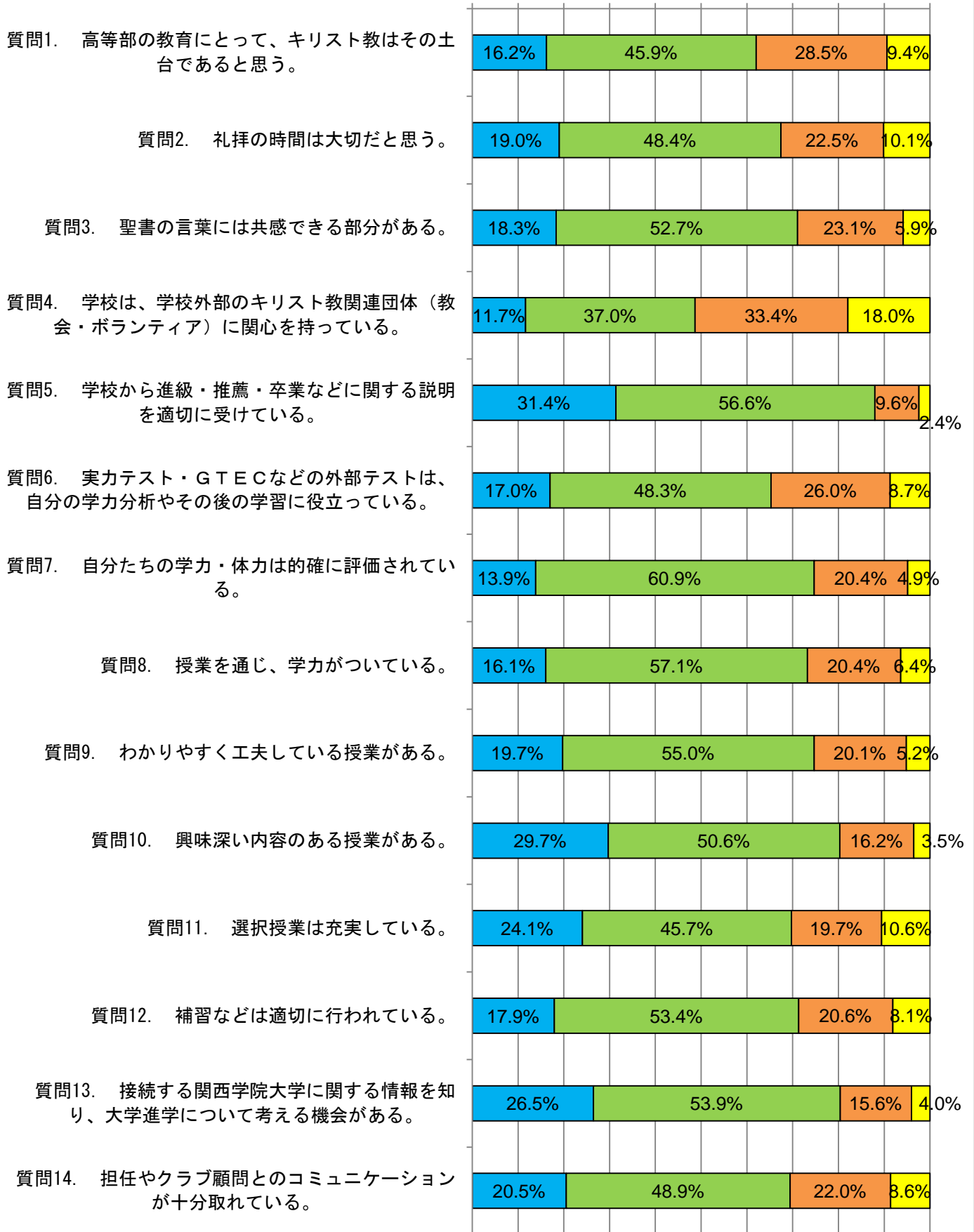
「人権教育」については、いじめの防止に継続して取り組まれ、人権侵害を受けている生徒が声をあげられる学校づくりを、今後とも目指し、改善していかれることが期待されます。

「国際理解教育」については、SGHのプログラムを高等部全体の国際化を進める大きな手段として利用し、国際理解教育のより一層の進展を進められることが、期待されます。

2015 年度学校評価

2015年度 学校評価アンケート集計結果
 高等部・生徒 質問1～14 (回収率 99.9% 989人/990人中)

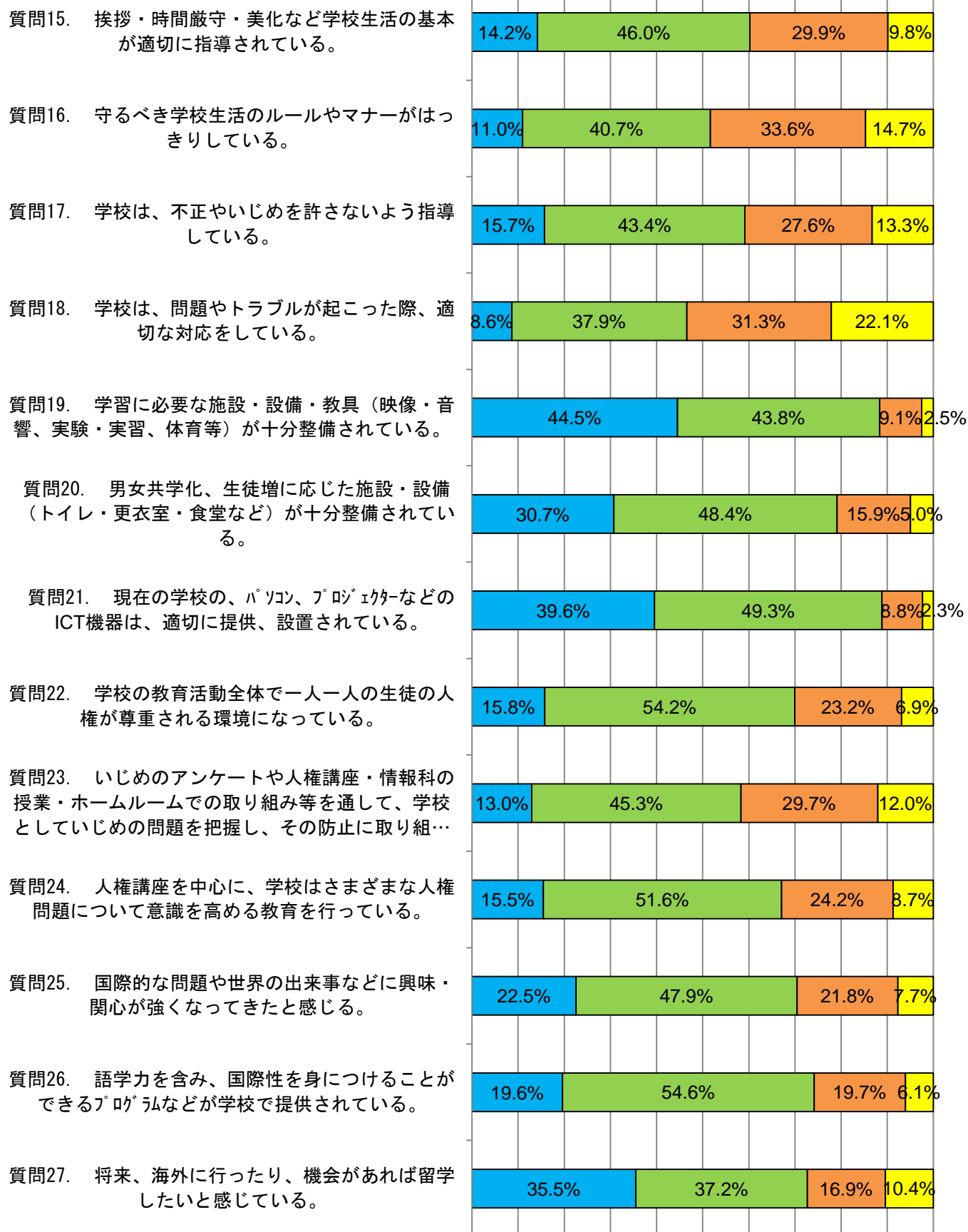
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



■回答番号1: 強くそう思う ■回答番号2: どちらかといえばそう思う
 ■回答番号3: あまりそう思わない ■回答番号4: まったくそう思わない

2015年度 学校評価アンケート集計結果
 高等部・生徒 質問15～27 (回収率 99.9% 989人/990人中)

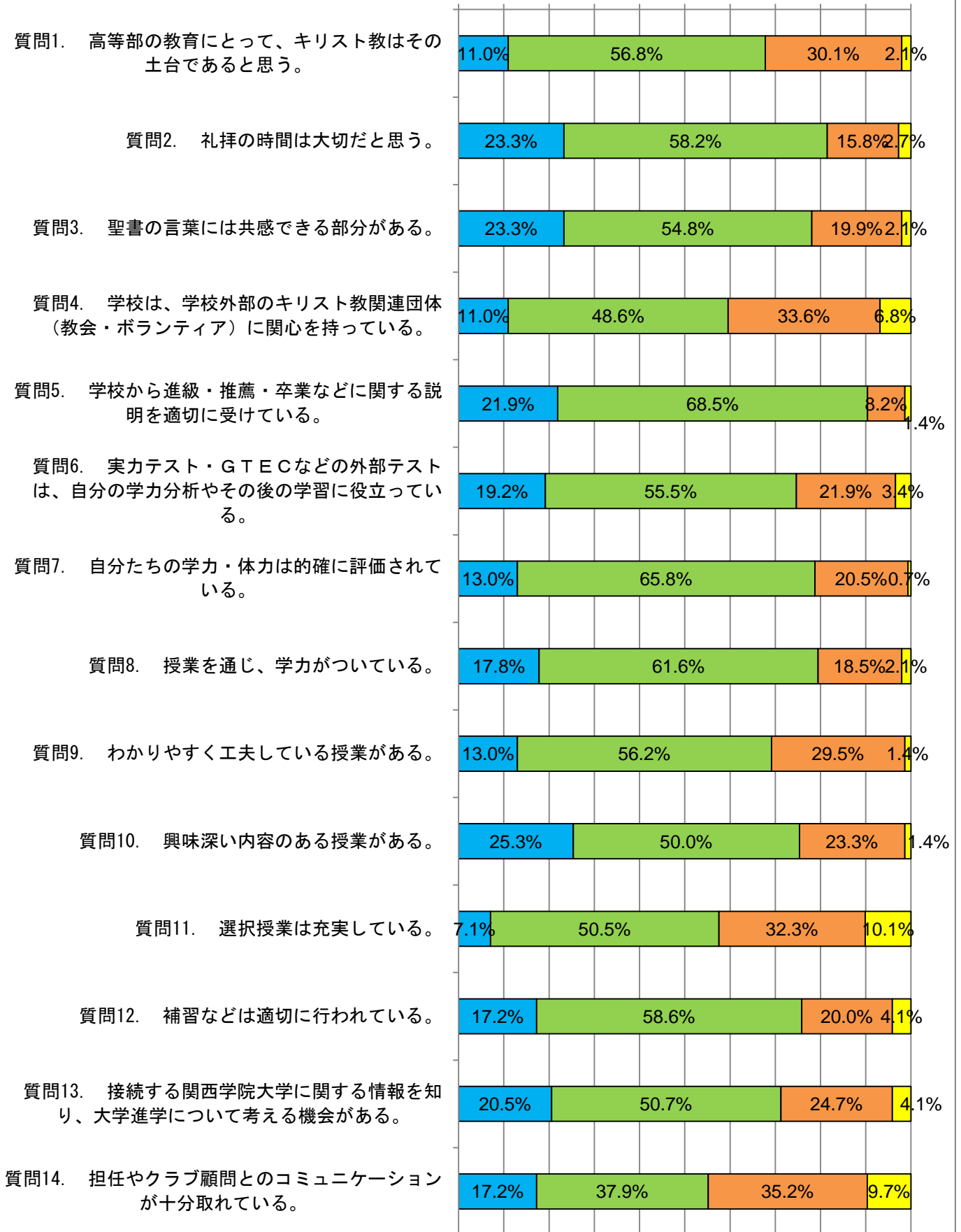
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



■ 回答番号1: 強くそう思う ■ 回答番号2: どちらかといえばそう思う
 ■ 回答番号3: あまりそう思わない ■ 回答番号4: まったくそう思わない

2015年度 学校評価アンケート集計結果
 高等部・生徒<1年女子> 質問1~14 146人

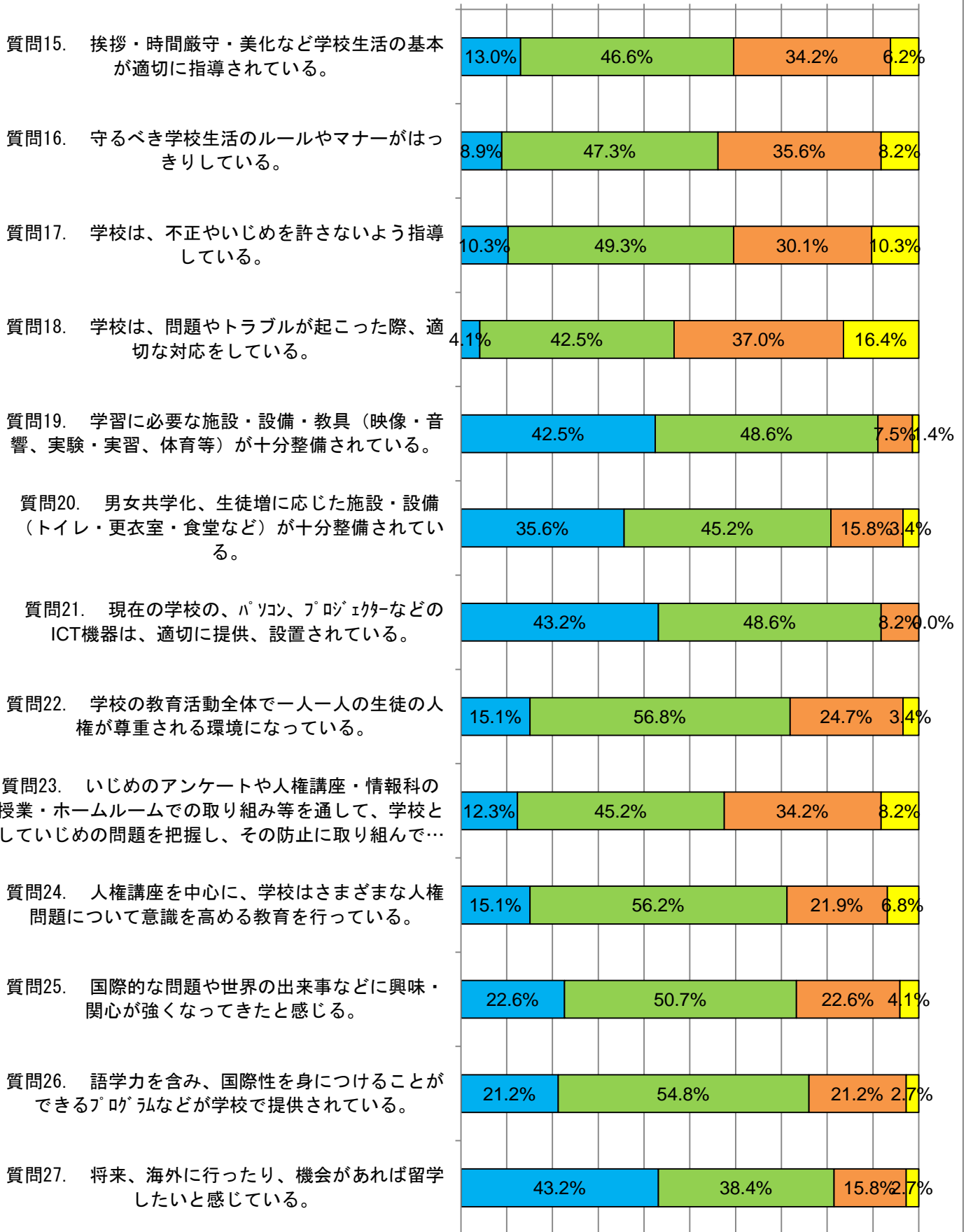
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



■ 回答番号1 : 強く思う ■ 回答番号2 : どちらかといえば思う
 ■ 回答番号3 : あまりそう思わない ■ 回答番号4 : まったくそう思わない

2015年度 学校評価アンケート集計結果
 高等部・生徒<1年女子> 質問15~27 146人

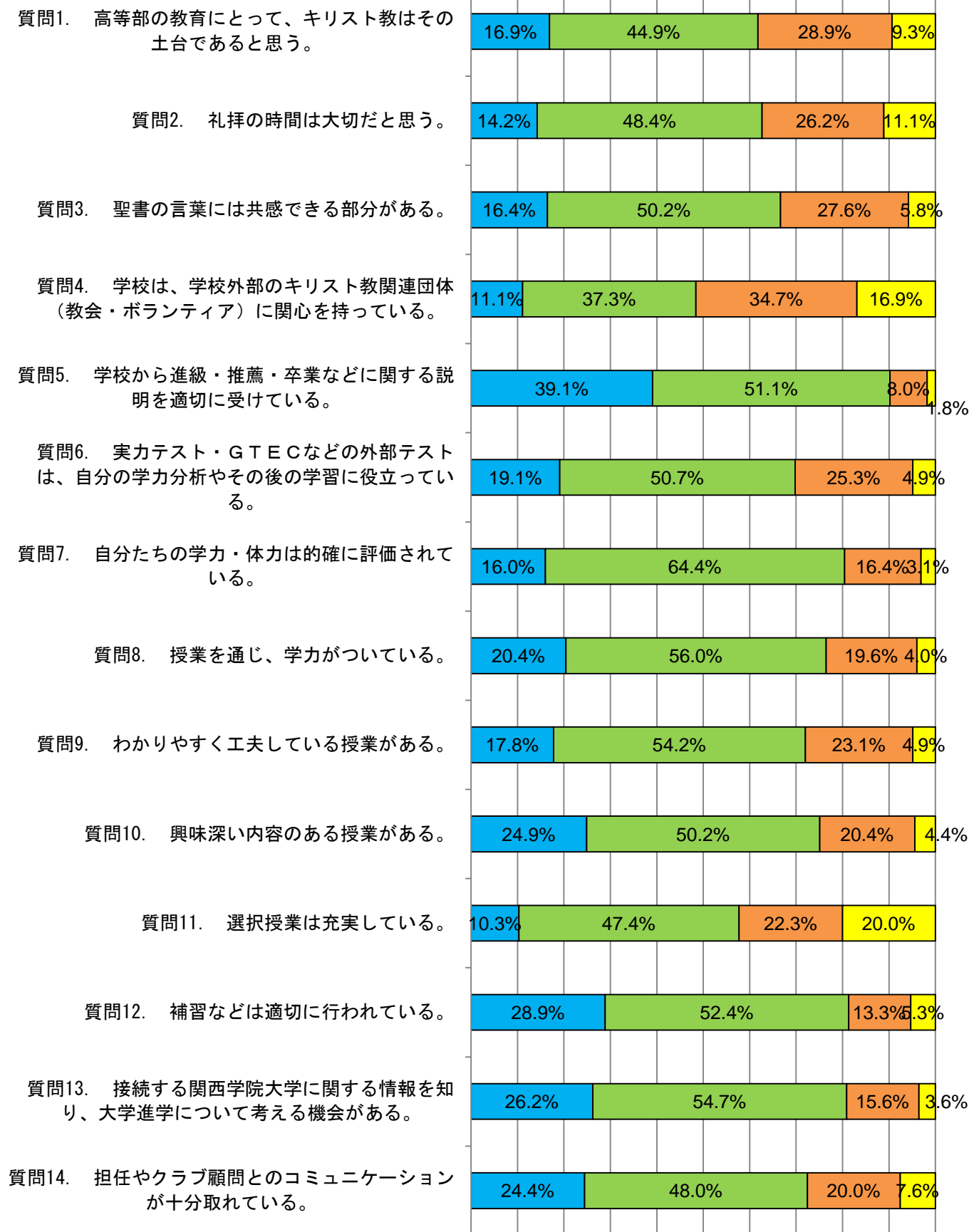
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



■回答番号1：強くそう思う ■回答番号2：どちらかといえばそう思う
 ■回答番号3：あまりそう思わない ■回答番号4：まったくそう思わない

2015年度 学校評価アンケート集計結果
 高等部・生徒 <1年男子>質問1~14 225人

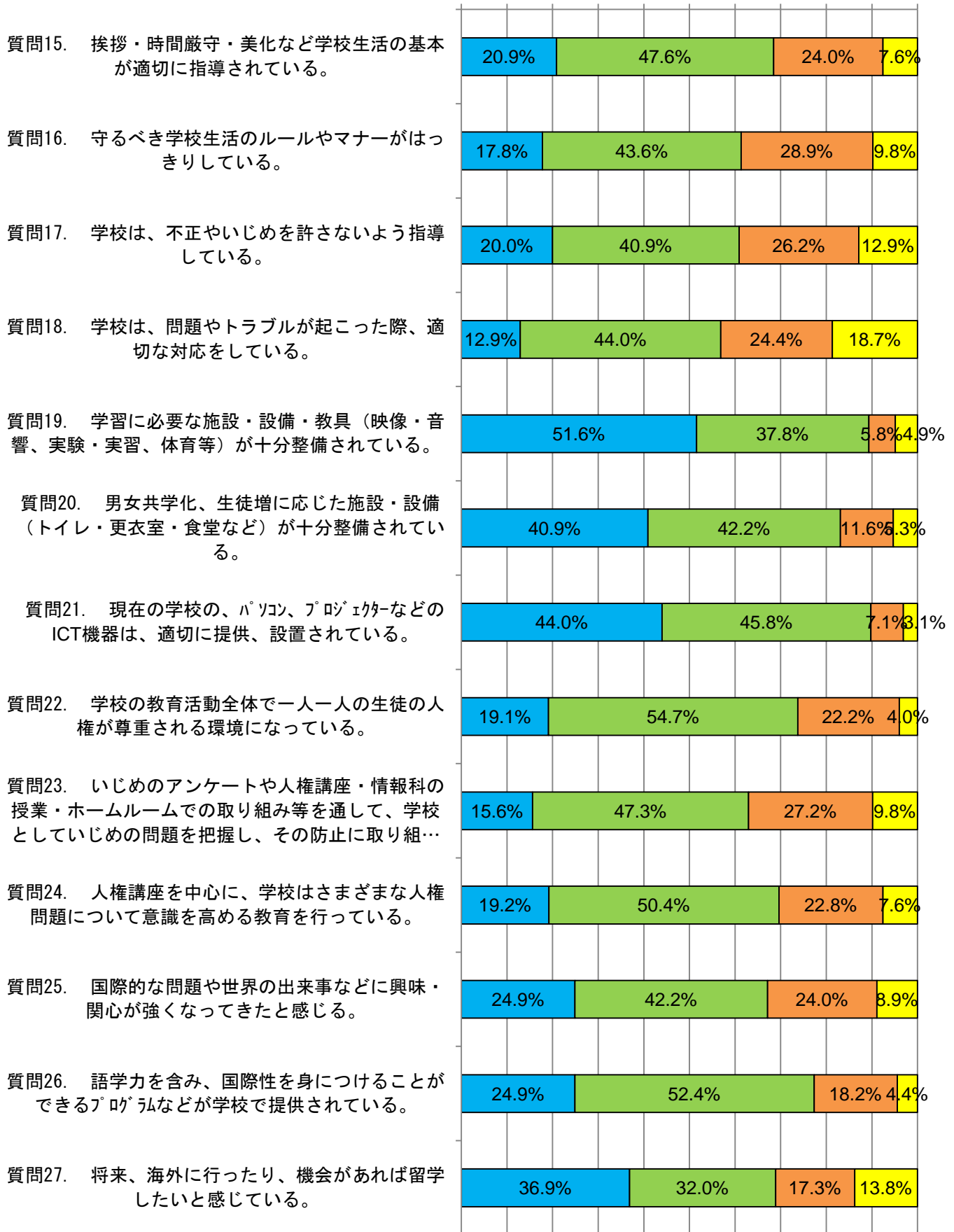
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



■回答番号1：強くそう思う ■回答番号2：どちらかといえばそう思う
 ■回答番号3：あまりそう思わない ■回答番号4：まったくそう思わない

2015年度 学校評価アンケート集計結果
 高等部・生徒<1年男子> 質問15~27 225人

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%

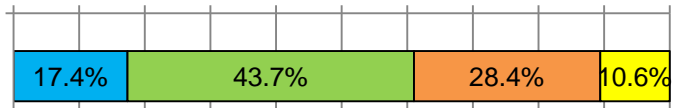


■ 回答番号1：強く思う
 ■ 回答番号2：どちらかといえばそう思う
 ■ 回答番号3：あまりそう思わない
 ■ 回答番号4：まったくそう思わない

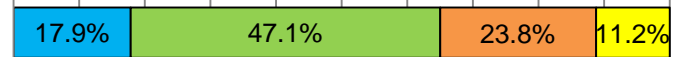
2015年度 学校評価アンケート集計結果
 高等部・生徒<男子1・2・3年> 質問1~14 784人

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%

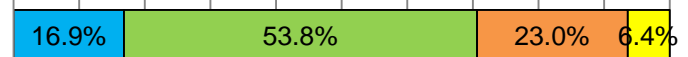
質問1. 高等部の教育にとって、キリスト教はその土台であると思う。



質問2. 礼拝の時間は大切だと思う。



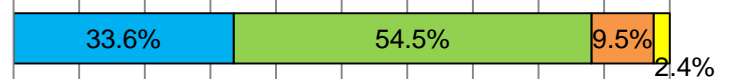
質問3. 聖書の言葉には共感できる部分がある。



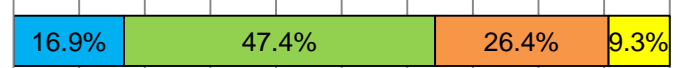
質問4. 学校は、学校外部のキリスト教関連団体（教会・ボランティア）に関心を持っている。



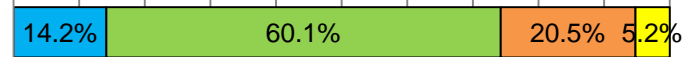
質問5. 学校から進級・推薦・卒業などに関する説明を適切に受けている。



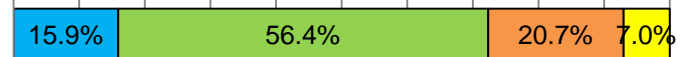
質問6. 実力テスト・GTECなどの外部テストは、自分の学力分析やその後の学習に役立っている。



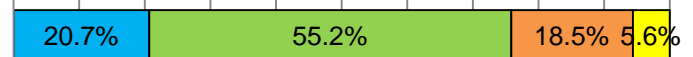
質問7. 自分たちの学力・体力は的確に評価されている。



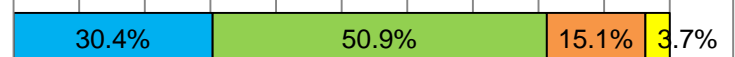
質問8. 授業を通じ、学力がついている。



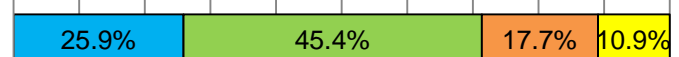
質問9. わかりやすく工夫している授業がある。



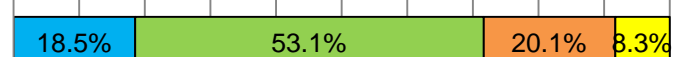
質問10. 興味深い内容のある授業がある。



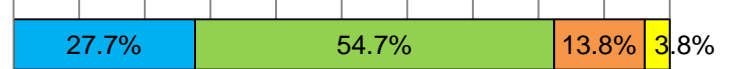
質問11. 選択授業は充実している。



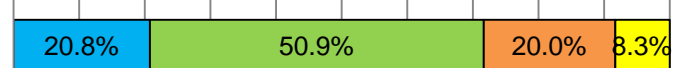
質問12. 補習などは適切に行われている。



質問13. 接続する関西学院大学に関する情報を知り、大学進学について考える機会がある。



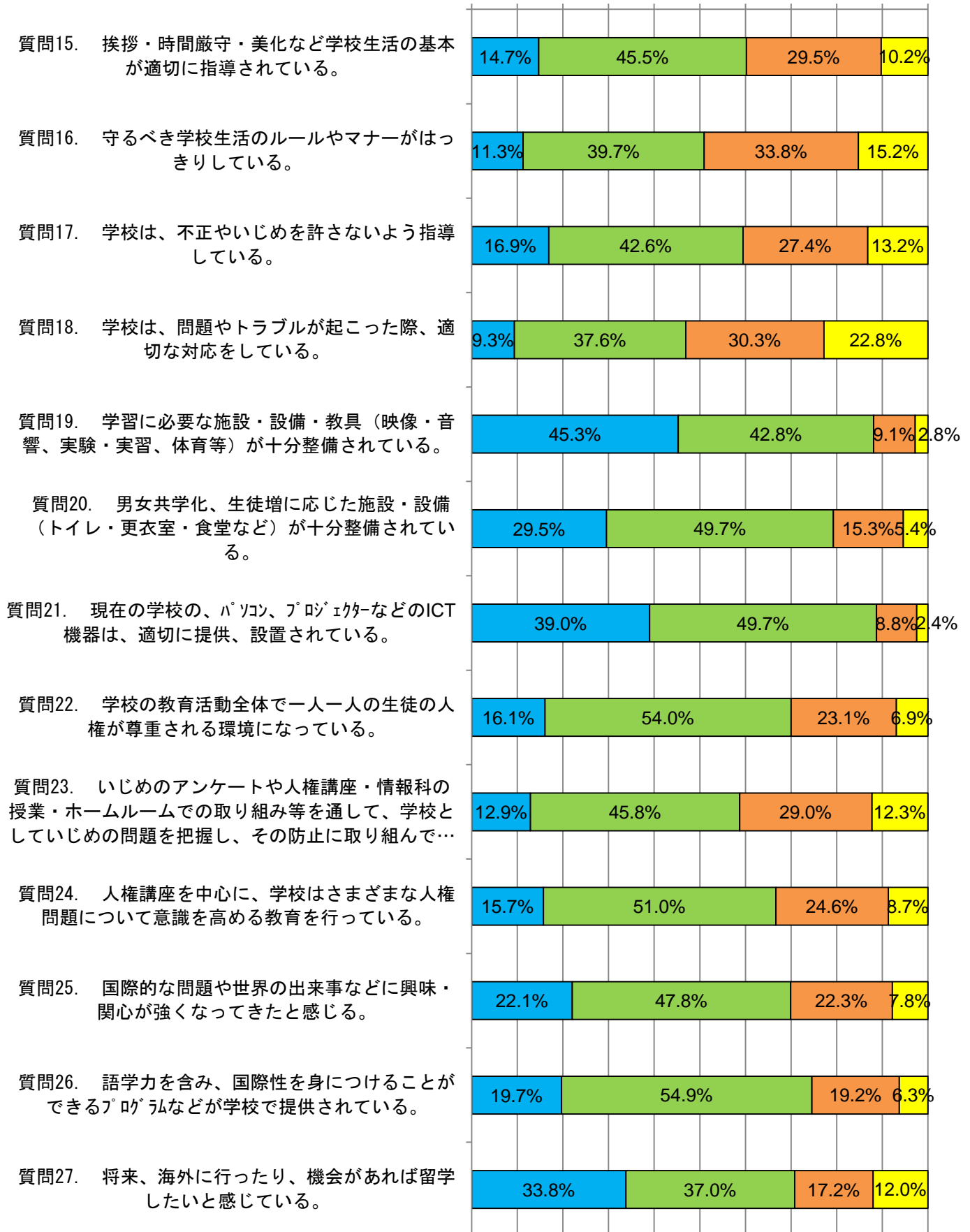
質問14. 担任やクラブ顧問とのコミュニケーションが十分取れている。



■ 回答番号1：強くそう思う
 ■ 回答番号2：どちらかといえばそう思う
 ■ 回答番号3：あまりそう思わない
 ■ 回答番号4：まったくそう思わない

2015年度 学校評価アンケート集計結果
 高等部・生徒<男子1・2・3年> 質問15~27 784人

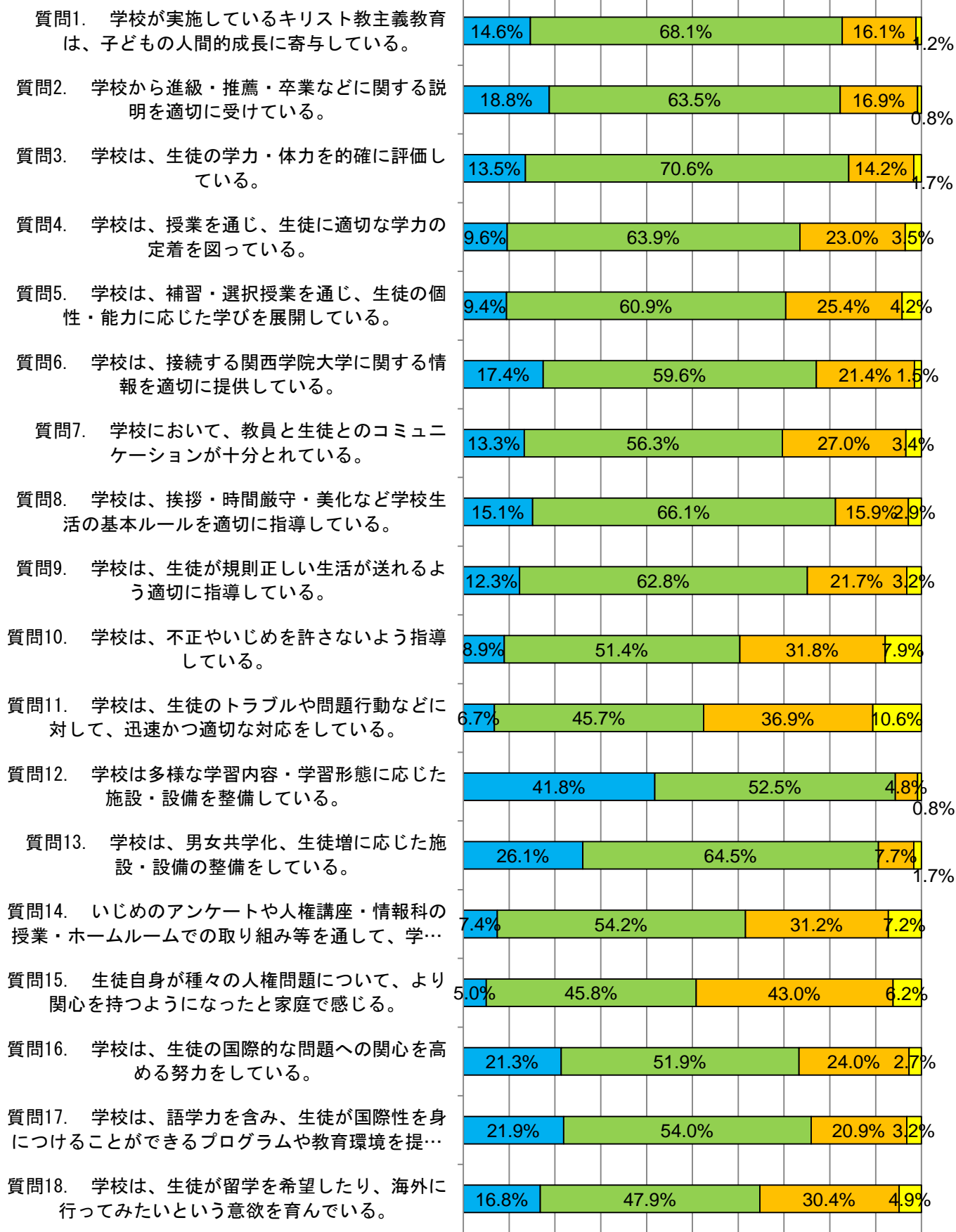
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



■ 回答番号1：強くそう思う
 ■ 回答番号2：どちらかといえばそう思う
 ■ 回答番号3：あまりそう思わない
 ■ 回答番号4：まったくそう思わない

2015年度 学校評価アンケート集計結果
 高等部・保護者 (回収率 59.9% 598人/998人中)

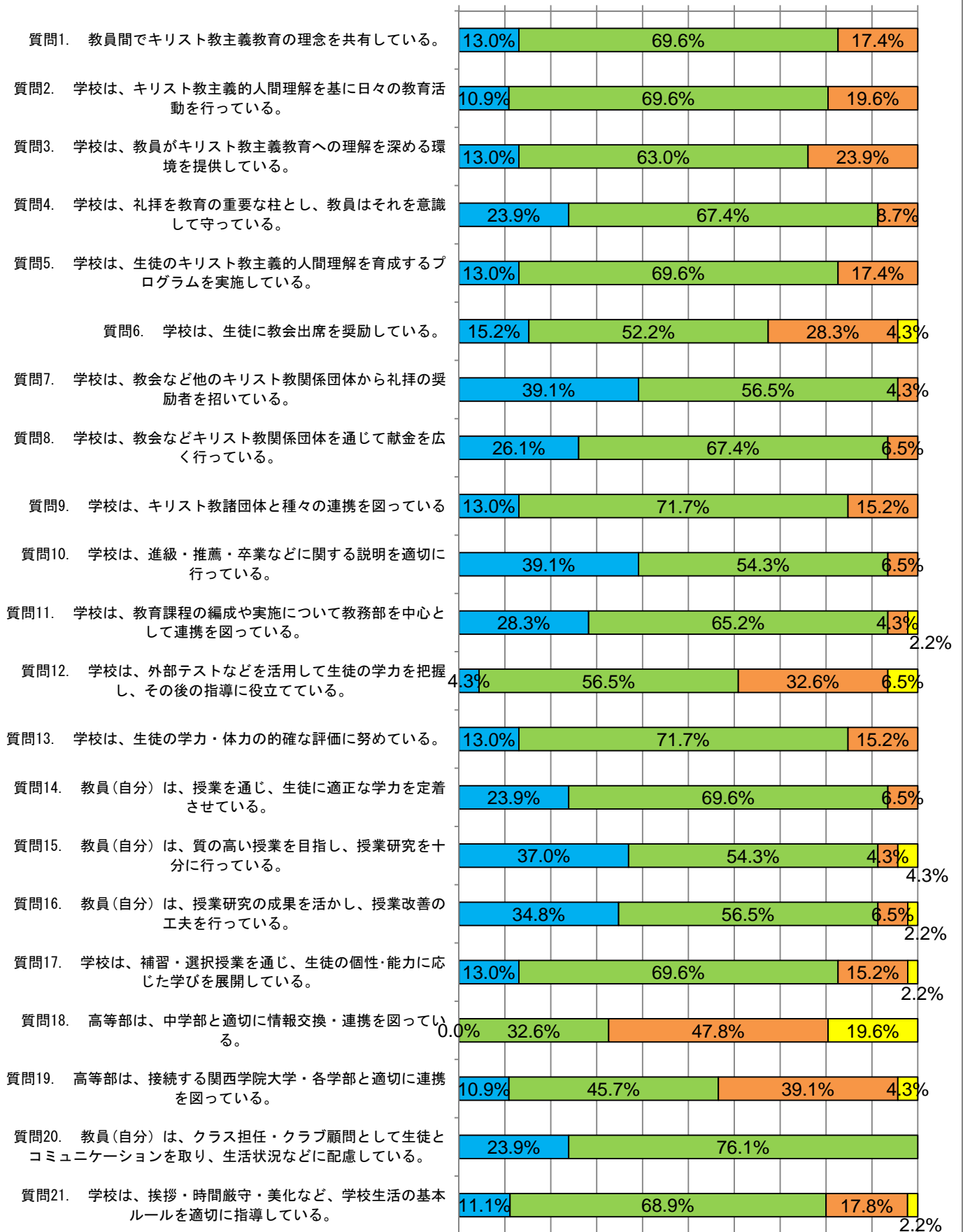
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



■ 回答番号1 : 強く思う ■ 回答番号2 : どちらかといえば思う
 ■ 回答番号3 : あまりそう思わない ■ 回答番号4 : まったくそう思わない

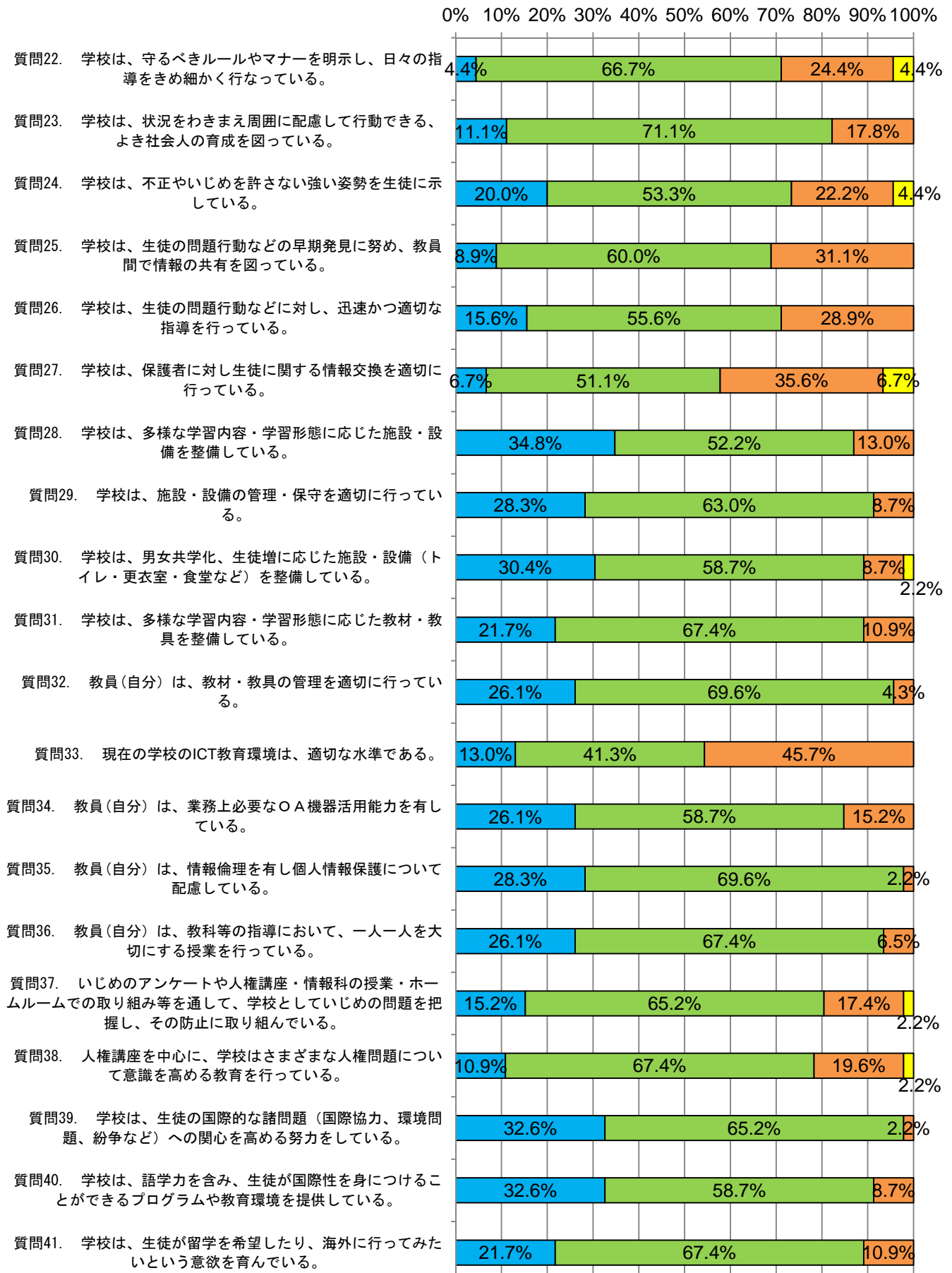
2015年度 学校評価アンケート集計結果
 高等部・教員 質問1～21 (回収率 100% 46人/46人中)

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



■回答番号1：強くそう思う ■回答番号2：どちらかといえばそう思う
 ■回答番号3：あまりそう思わない ■回答番号4：まったくそう思わない

2015年度 学校評価アンケート集計結果
 高等部・教員 質問22～41 (回収率 100% 46人/46人中)



■ 回答番号1: 強く思う
 ■ 回答番号2: どちらかといえば思う
■ 回答番号3: あまりそう思わない
 ■ 回答番号4: まったくそう思わない